オキナグサの新潟県における分布と自生地の保護

石沢　進

オキナグサの分布

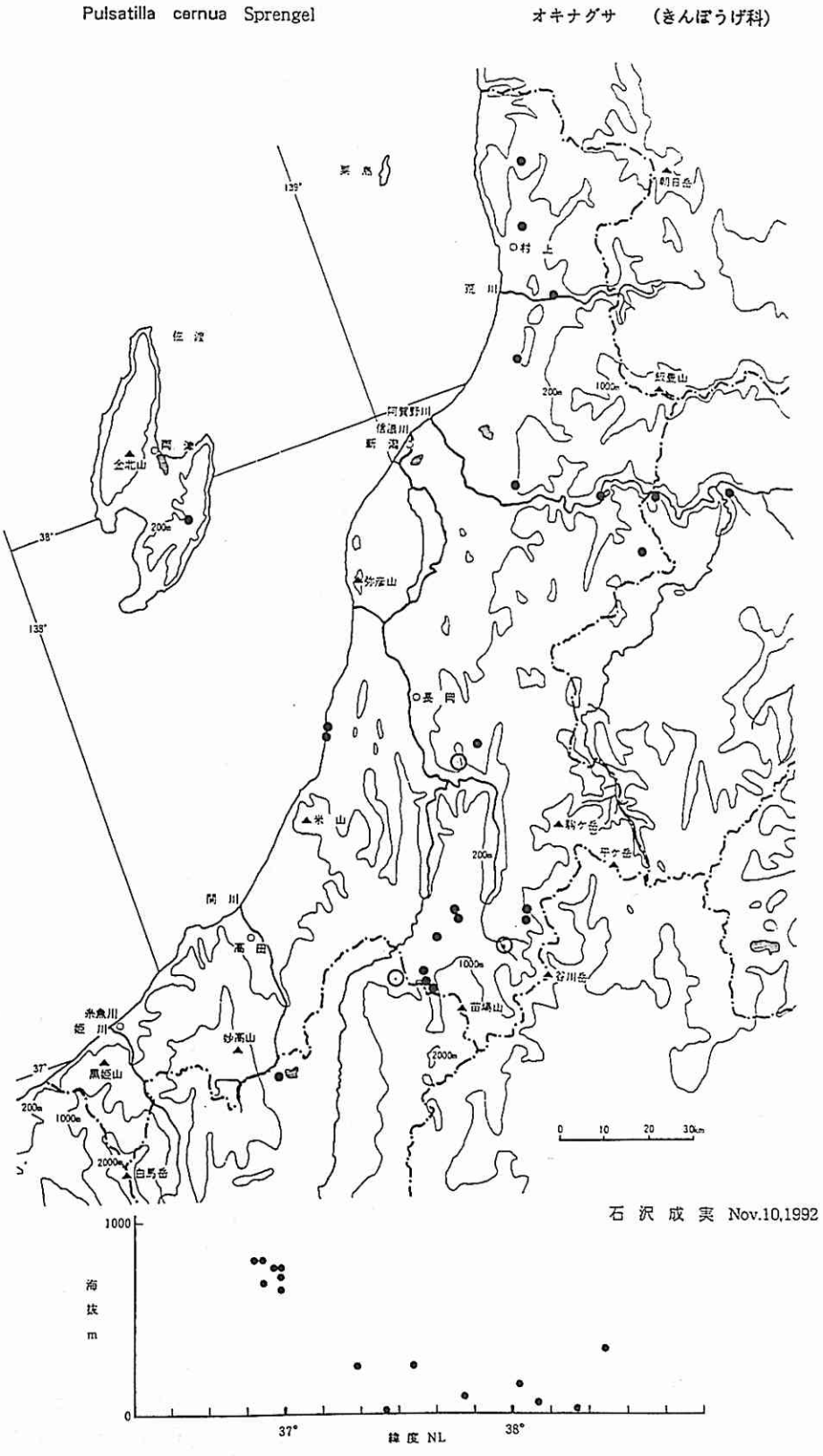
オキナグサは、過去の資料をもとに作成した分布図から県内に広く分布し、また、古老の話から人の生活圏に普通にみかける植物であった。しかし、その植物が戦後急激に減少し、過去の分布地点から消失している。現在では全国でも絶滅危惧種となり、県内の自生地も絶滅の危険な状況になっている。

オキナグサの近年における分布・生育情報

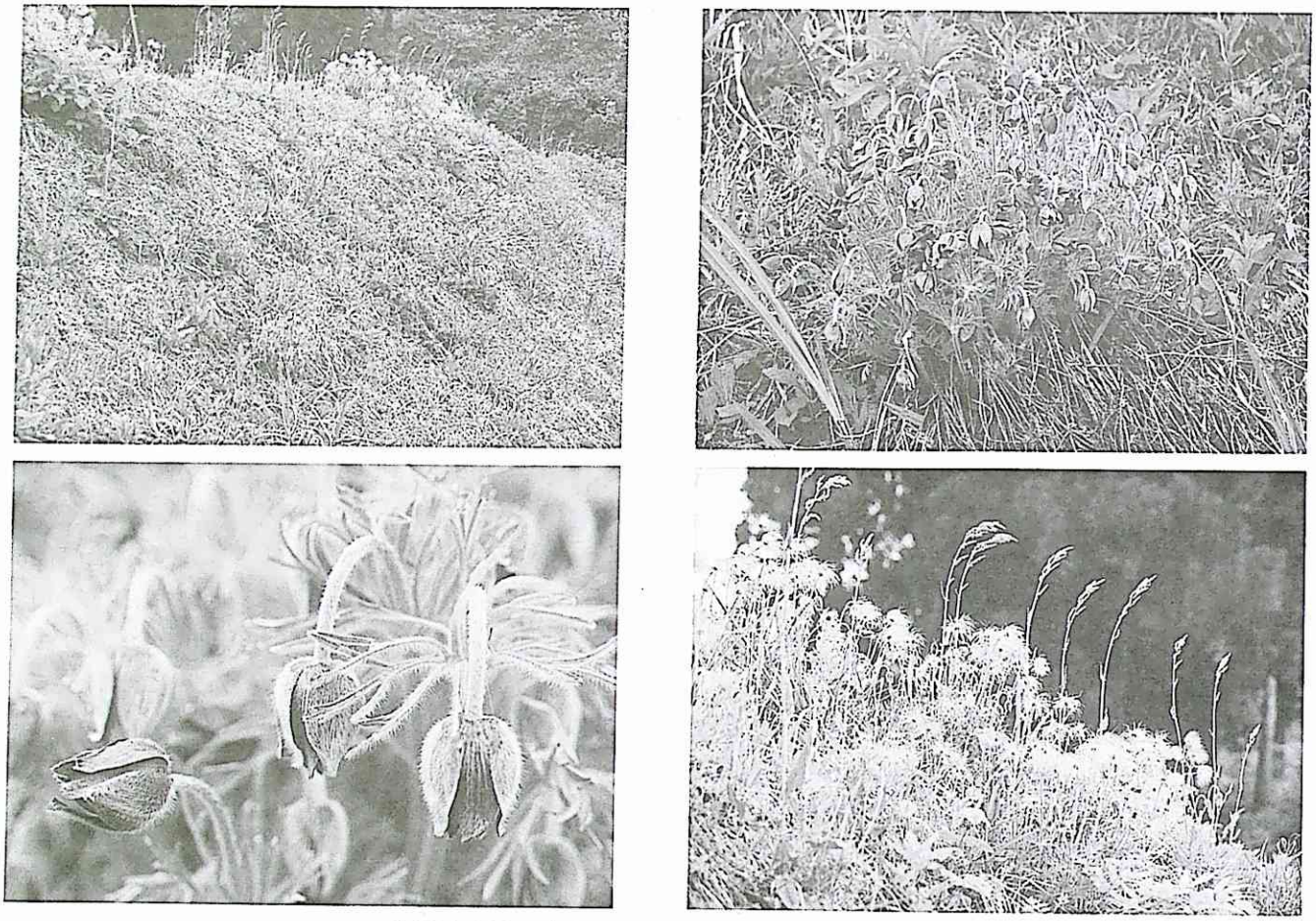
過去の分布地点すべてを確実に調査したわけではないが、自生状態で残っている地域はごくまれになっていると思われる。新潟県の絶滅危惧種の選定の際にも、確実に生育している地点が少なく、県内でも自生地が消滅の危険な状況になっていることから、絶滅危惧Ⅰ類にリストアップしている。ここ2・3年の調査でも県南部の湯沢町で分布を確認しているが個体数は極めて少ない（分布図参照）。そのような状況の中で、魚沼市広神地区では、田の畦の一角に高密度に生育していることを県立植物園の職員の案内で確認できた。生育地の株の中には、大きく成長し、一株でも50個以上の花をつけた株がみられた。

参照　絶滅危惧種 オキナグサ 地元有志ら保護作戦（9頁）

新潟日報 2005年6月4日



分布図：オキナグサの新潟県とその周辺における水平（上）・垂直（下）分布
石沢成実（1992）新潟県植物分布図集 第13集 29-30.　○印　近年の生育地



魚沼市広神の自生地と生育状況 2005 5 31 撮影

昭和20年代、新潟県の山間地域の田圃の畦に同様に繁茂していたようである。私の郷里長野県栄村でも家の周辺の田圃で普通に見られ、珍しい植物ではなかった。物資の乏しい時代であり、オキナグサの果実を集めて手の中で丸めていると、実の部分が外側に、実の付属物の毛が内側でからみあってボールができあがるので、それを友達同志で投げ合って楽しんだ思い出がある。それほど身近な植物であり、当時はその種が、身の回りから消滅することなど想像もできなかった。(参照　オキナグサの新潟県における分布図)

消滅の要因

田圃や草地にごく普通にみられた植物が消滅する要因は、単純ではないようであるが、一つには、戦後の農作業の改革にあるように思われる。昔の農作業では、家畜の飼料のために田圃や草地の草刈りを行っていた。草刈りは、人力で鎌を使って刈り取るので、地面から数センチの部分はその場に残り、地上部すべてがなくなることはない。オキナグサの葉は根生で横に広がり、草丈が低いので、草刈りで全てが刈り取られずに地表近くの葉が残る。ところが、最近の草刈りは草刈り機で刈るので、地面すれすれまで取り去られる、つまり地上部のすべてを刈り取ってしまい、地下部だけが地中に残る。そのような刈り取りでは必然的に再生できない植物があり、オキナグサはその一例であるとみられる。機械化により馬や牛など家畜を飼う必要がなくなり、草地で草を刈って家畜に与える習慣が消滅してしまったために草地は木が茂り、植生が大きく変わってしまっている。地上すれすれに生活しているオキナグサは上層の植物の繁茂により、草地から姿を消してしまう結果になっている。

田圃の畦では、草刈りが機械化された上に、除草剤の普及により、畦の雑草はすべて根絶やしするという、農作業の改革によってオキナグサは消滅の一途をたどった推定される。

広神でオキナグサが生存しているのは、昔ながらの草刈りを存続していたことにあるようで、本種の存続には欠かせない条件であると思われる。

保護のあり方

地元の魚沼山野草の会・仲丸　幸氏は、広神村が合併する前に、村の花としてオキナグサを提案し、旧広神村役場前にオキナグサを植栽して村民に理解を求めたが、賛同が得られなかったという。同氏の植栽したオキナグサは現魚沼市の市役所の玄関前に生き続けており、市民に理解をして頂くのも大切である。また、広神のオキナグサの保護にあたっては、次のようなことが考えられる。(10頁へ続く)

新　潟　日　報　　2005年(平成17年)6月4日（土曜日）

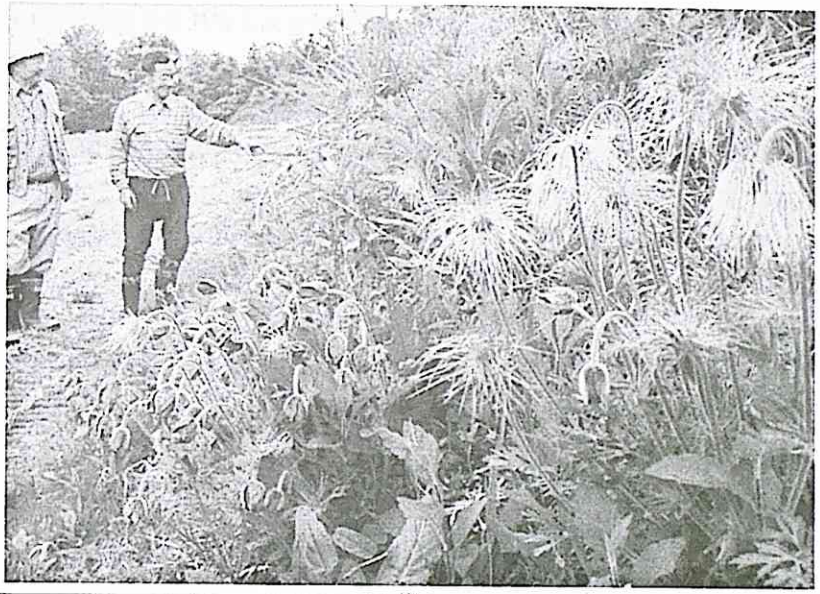
絶滅危惧種　オキナグサ

地元有志ら保全作戦

魚沼再生願いを込め

棚田改修で消滅の恐れ

中越地震で被災した魚沼市の棚田で、改修によって消滅するおそれがある貴重な野草「オキナグサ」を保全する計画が、地元有志や県立植物園の協力で進んでいる。素朴な紫茶の花は、棚田の原風景のシンボルともいわれ、被災地の植生を守り、復旧するモデルケースとして注目される。



オキナグサはかつて全国的に山あいの土手など草刈りをする草地で普通に自生していた。しかし、耕作放棄や除草剤使用などで激減。野草マニアの乱獲も増え、現在、県内の自生地は数カ所程度のみとされる絶滅危惧種。

数少ない群生があるのは魚沼市（広神）。同市の農業、大家三郎さん（七）は無農薬、有機栽培で米をつくっており、棚田のあぜや斜面にオキナグサが自生。株周りは手刈りするなど、昔ながらに手間をかけ、大切にしてきた。

ところが、昨秋の中越地震で棚田にひびが入り、今年は作付けができない状態で、今月中旬には棚田の土手を改修する。通常、表土をはぎ取り、斜面を重機でたたき固めるが、そのまま施工が進めば、オキナグサは完全に消えてしまう。

昨年からこの希少種調査をしていた新潟市（新津）の県立植物園スタッフが事態を重視。先月末に大家さんや地元の工事関係者に保全の重要性を説明したところ、工事前に一時的に移植し、工事後に再び現地に植え戻す〝復旧作戦〟がにわかにまとまった。

現地調査した石沢進・元新大教授（植物学）は「オキナグサはこの地域の棚田の原風景に欠かせない。貴重種に配慮しながら改修する意義は大きい。被災地の植生保全のモデルになってほしい」と話している。

オキナグサ　高さ30㌢ほど。5月ごろ紫茶色の花を咲かせる。種子は白毛が目立ち、翁（おきな）の白髪を思わせる。国の「絶滅危惧Ⅱ類」、県ではより絶滅の恐れが高い「絶滅危惧Ⅰ類」。種子で簡単に増殖できるのに、根こそぎ乱獲するマニアも多い。

棚田の土手でオキナグサを調べる地主の大家さん（右）と石沢元教授。紫茶色の花は盛りがすぎ、名前の由来になった白毛のある種子が目立つ＝5月31日、魚沼市

現地視察の後、魚沼市の農林課を訪れて保護の要請をしてきました。その後、市の担当者も現場を確認し、市としても保護する方向で配慮したい旨の電話をいただきました。

・生育地の現状維持

当地は地震の激震地であり、田圃の多くは崩壊して修復のために大きく改変しなければならない状況にある。幸い生育地の畦の一部は改変しないで温存できるとのことであり、現状維持が可能であるという。少なくともこの地域からオキナグサの消滅は避けられそうである。残された部分はこれまでと同様な管理を行い、生育地の現状維持を続けてほしい。

・災害地での再生

災害を受けた部分は、復旧作業を行い、田圃に戻して畦に生えていたオキナグサは、改変前に抜き取り保存しておいた苗を移植できるという。根付くまで心配りも必要であるが、その後は残された部分と同様な管理を行ってほしい。

・地域住民による保護への理解と協力

オキナグサの保護には、その植物の分布上の現状を地域住民にご理解頂きたい。全国的にも県内でも自生地がほとんど消失していることにある。つまり、広神における生育は他ではほとんど見られなくなった過去の場景であり、貴重な存在である。現在の生育地から周辺に広めて、この地域での宝物になるように、集落全体で生存を守って頂けると、地域の特色としてクローズアップする可能性が高い。本種の管理には、昔ながらの農作業を行う必要があるようで、余計な労力をかけなければならない。そのために、地域住民の理解と協力なしでは実現できない。この植物を基盤に地域の特色を生かす機会でもあり、地域住民の一致した協力体制作りを切望している。

・オキナグサの里作り

上記のような取り組みを推進し、オキナグサを保護しながら、特色ある里作りを進めてほしい。「オキナグサの生育地の農産物」として、付加価値をつける試みに挑戦し、オキナグサを通じて地域の活性化に結び付けて頂ければ、この絶滅危惧種の保全も安泰であると期待できる。

参照　梅花藻かれん 山形で保護活動実る

新潟日報 2004年7月5日

文献　戸田　明（1999）山古志分校敷地内のオキナグサ群落 植物保護 26号：2頁

新　潟　日　報　2004年(平成16年)7月5日（月曜日）

梅花藻かれん

山形で保護活動実る

山形市の市街地を流れる山形五堰の一つ笹堰で、梅花藻が真っ白いかれんな花を咲かせ始めた。

梅花藻の名前は、花が梅の花の形に似ていることに由来している。キンポウゲ科の多年草で、北海道や本州の河川、水路に生息し、毎年六月ごろ、濃い緑色の藻の中に白い花を咲かせる。

山形五堰にはかつて、いたる所に自生していたが、生活排水などの影響で環境が悪化し、一時はかなり減少した。ここ数年、地元住民を中心にして堰のクリーン作戦を展開する一方、行政も調査や保護活動に取り組み、増えている。

笹堰で花が咲き始めた梅花藻＝山形市

笹堰では、緑色の藻が揺れ、直径一㌢ほどの白い花が水面から顔をのぞかせ、観賞を楽しむ住民の姿もみられる。